

平安京左京三条三坊五町  
烏丸御池遺跡

2011年

古代文化調査会



平安京左京三条三坊五町  
烏丸御池遺跡

2011年

古代文化調査会



## 例　　言

1. 本書は、古代文化調査会が京都市中京区衣櫛町 55 番地において、教育施設建設に伴い実施した平安京左京三条三坊五町・烏丸御池遺跡の発掘調査概要報告書である。
2. 発掘調査はジケイ・スペース株式会社より委託を受けた古代文化調査会の上村憲章が担当した。
3. 調査にあたっては、京都市文化市民局文化財保護課の指導を受けた。
4. 本書の編集は上村がおこなった。
5. 図面及び遺物整理は、上村が分担し、遺構図の製図、遺物の実測・製図は板谷桃代、水谷明子がおこなった。
6. 本書の執筆は上村がおこなった。
7. 本書で使用した方位及び座標の数値は世界測地系（新測地系）平面直角座標系VIによる。記載した数値は m 単位で、水準は T.P.（東京湾平均海面高度）である。
8. 本書で使用した地図は、京都市都市計画局発行の 2500 分の 1 の地図（三条大橋・壬生）を調整し、使用した。
9. 土壤の色調の表記は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』に準じた。
10. 遺構番号は実測図・写真ともに共通している。
11. 発掘調査及び遺物整理に際して、下記の方々の御指導・御協力を得ることができた。記して感謝の意を表します。（所属・敬称略、五十音順）

油谷雅次　家原圭太　岩本敦嗣　宇野隆志　馬瀬智光　枝松　淳　梶川敏夫  
北崎仁志　北田栄造　木村規陽子　後野正幸　佐々木良範　鈴木紘次　鈴木久史  
玉井創　塙本孝訓　西森正晃　長谷川行孝　堀 大輔　宮原健吾　村上孝則  
(株)明輝建設　(株)大高建設　(財)京都市埋蔵文化財研究所  
ジケイ・スペース株式会社　東レ建設株式会社　(有)京都編集工房

## 本文目次

平安京左京三条三坊五町・烏丸御池遺跡

I 調査の経緯	1
II 調査の経過	1
III 遺構	3
IV 遺物	6
V 小結	13

## 図版目次

図版 1	遺跡 第 1 面遺構実測図
図版 2	遺跡 第 2 面遺構実測図
図版 3	遺跡 第 3 面遺構実測図
図版 4	遺跡 第 4 面遺構実測図
図版 5	遺跡 東壁実測図
図版 6	遺跡 南壁実測図
図版 7	遺跡 1 調査地近景（南東から） 2 東区第 1 面全景（南東から）
図版 8	遺跡 1 東区第 2 面全景（南東から） 2 東区第 3 面全景（南東から）
図版 9	遺跡 1 東区第 4 面全景（南東から） 2 西区第 1 面全景（北から） 3 西区第 2 面全景（北から）
図版 10	遺跡 1 西区第 3 面全景（北から） 2 西区第 4 面全景（北から） 3 第 1 面井戸 3（東から） 4 第 1 面井戸 18（東から）

- 5 第2面土壙45（北東から）  
 6 第2面柱穴69（北から）
- 図版11 遺跡 1 第2面柱穴75（北から）  
 2 第2面土壙63下層（北から）  
 3 第2面土壙122（西から）  
 4 第3面柱穴172（北から）  
 5 第3面手前から柱穴109、302、172（北から）  
 6 第3面柱穴273（南から）  
 7 第3面柱穴297（北から）  
 8 第3面手前から柱穴207、209、208（北から）
- 図版12 遺跡 1 第3面土壙287（北から）  
 2 第4面柱穴381（北から）  
 3 第4面柱穴405（北から）  
 4 第4面溝364土器出土状況（北から）  
 5 第4面溝364堆積状況（西から）  
 6 第4面土壙605（北から）  
 7 X-109.924.5m部分断割り状況（南東から）  
 8 調査区南壁西半部堆積状況（北から）
- 図版13 遺物 土壙605・土壙311・土壙238・土壙526出土遺物
- 図版14 遺物 土壙96・土壙62・土壙45下層出土遺物
- 図版15 遺物 土壙11出土遺物
- 図版16 遺物 整地層第1～3層・土壙11・土壙59・土壙63・柱穴109・土壙112・土壙121・  
 土壙140・土壙557出土遺物

## 挿 図 目 次

図1	調査地位置図	1
図2	平安京条坊と調査地位置図	2
図3	四行八門と調査位置関係図	2
図4	京都史蹟會の碑文	2
図5	溝364出土土器実測図	6
図6	土壙311出土土器実測図	6

図 7	土壤 238 出土土器実測図	7
図 8	土壤 121 出土土器実測図	7
図 9	土壤 526 出土土器実測図	8
図 10	土壤 96 出土土器実測図	8
図 11	土壤 62 出土土器実測図	9
図 12	土壤 45 下層出土土器実測図	9
図 13	土壤 11 出土土器実測図	11
図 14	土壤 11 出土石製品実測図	11
図 15	出土瓦拓影・実測図	12

平安京左京三条三坊五町  
烏丸御池遺跡

## I. 調査の経緯

調査地は京都市中京区衣棚町 55 番地である。当地は周知の遺跡・平安京左京三条三坊跡、および烏丸御池遺跡（弥生～古墳時代）に該当する。2010 年、医療関係の教育施設建設が計画され、京都市文化市民局文化財保護課による試掘調査の結果、平安時代の整地層や柱穴が認められた。発掘調査においては、京都市の指導のもと施主との三者協議の結果、当調査会が 2010 年 10 月 5 日より発掘調査をおこなうこととなった。

## II. 調査の経過

敷地は平安京左京三条三坊五町の西二～三行、北五～八門に該当する。調査区域そのものは同町の南東部、西二～三行、北六～七門の範囲にある。五町には、平安時代中期、少納言源実明の母の屋敷があったが、元永元（1118）年に火事のために焼失してしまった（『中右記』同年正月27日条）。鎌倉時代初期の建仁元（1201）年、三条大路と町小路（町尻小路）の交差点付近で火

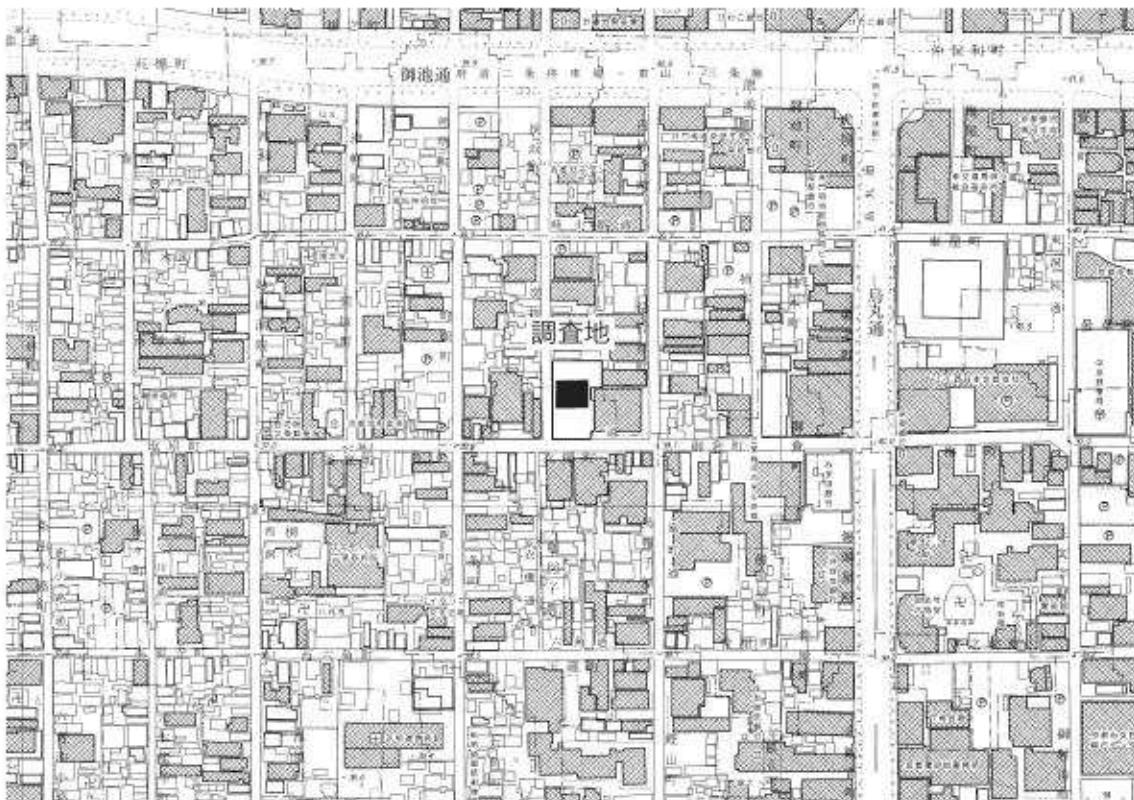


図1 調査地位置図 (1/5,000)

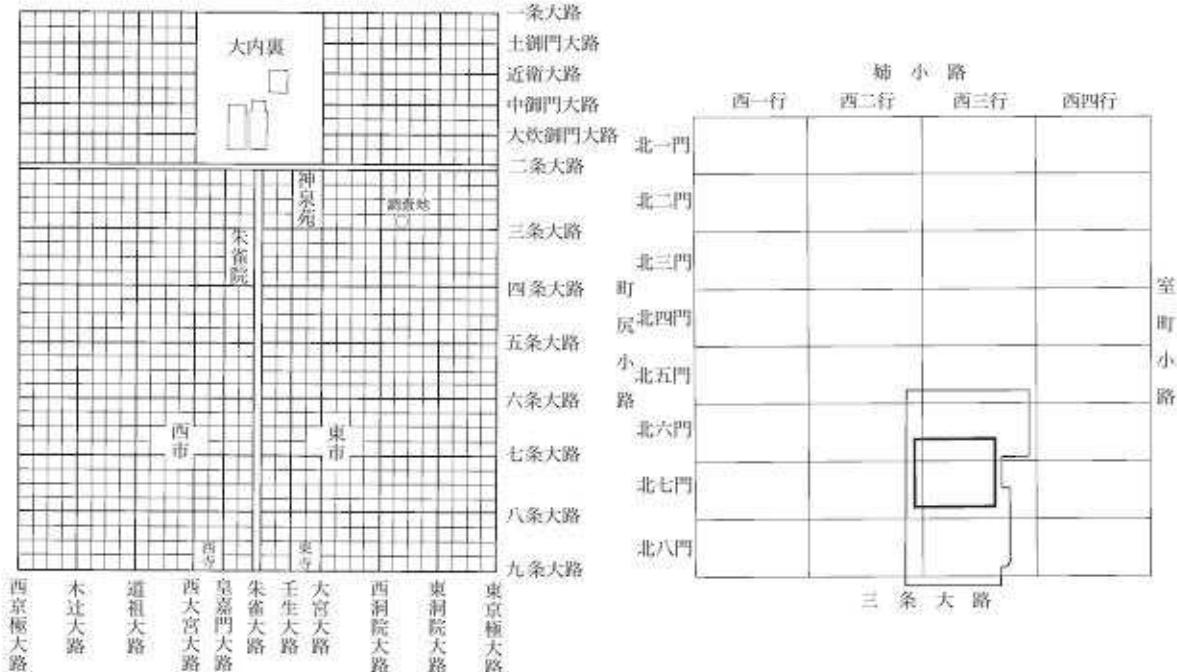


図2 平安京条坊と調査地位置図

図3 四行八門と調査位置関係図(1/2,000)



図4 京都史蹟會の碑文

災があったとの記事がある（『三長記』同年7月18日条）。同町についてはこれ以外の文献記事を見つける事はできないが、現在の町名となった「三條衣棚」について「京都史蹟會」は「室町時代以降、此地に法衣業者が集まって棚賣を始めやがて町名となって現在に及んだ。殊に弘治年間（1555～57年）千切屋の祖が此所に店舗を開きしより其の分家別家一門次第に繁栄し此町を中心として近辺に同業を営んだ者百余軒の多きに上ったという。…後略…」と碑文に刻んでいる。

調査は平成22（2010）年10月8日から同年12月20日までの間、調査面積360m<sup>2</sup>を4面にわたって行った。また、工事工程の都合上、東部分の調査を先に行い、後に西側部分の調査を補った。

なお、調査の方法としては、（財）京都市埋蔵文化財研究所が作成した平面直角座標系VIによる平安京の復原モデル60を使用し、4mメッシュのグリッドを設定し、遺構遺物の記録をとる方法をおこなった。

左京三条三坊五町の築地四隅の座標値（新測地系）はそれぞれ以下の通りである。

#### 左京三条三坊五町

北西	X = -109,830.05m Y = -22,207.41m	北東	X = -109,829.56m Y = -22,088.02m
南西	X = -109,949.44m Y = -22,206.92m	南東	X = -109,948.95m Y = -22,087.53m

### III. 遺構

現表土下約1.2m程で第1面とした近世初頭頃の遺構面に達する。以後、整地層がおむね3層確認できそれぞれの上面と、地山面とで都合4面の遺構面を確認した。整地層第1層は東壁で15層、南壁で17層としたもの、整地層第2層は東壁で16層、南壁では29層、整地層第3層は東壁で38層、南壁では46層としたものに該当する。第4面は現表土下1.6～1.8mで標高は37.9～38.1mである。第1面は桃山時代から江戸時時代以降、第2面は鎌倉時代から室町時代、第3面は平安時代後期から鎌倉時代、第4面は平安時代後期以前の遺構面である。以下時代を追って主な遺構について記す。

#### 平安時代後期以前

整地層第3層を取り除くと第4面が検出された。この面でいちばん新しい遺構は12世紀代平安後期のもので、その他に10世紀、9世紀後半代の土壙や溝、柱穴などを検出した。また調査区南西部で縄文晩期の土器片を少量含む土壙も検出している。

##### 土壙 605（図版4・10の2・12の6）

東西幅0.7m、南北幅0.6m以上、深さ0.23m前後をはかる。周辺の地山ベースにはほぼ近い10YR4/3にふい黄褐色砂泥が堆積する。

##### 溝 364（図版4・9の1・12の4と5・10の2）

調査区北部で検出された東西方向の溝である。幅は0.6～0.7mであるが輪郭は不明瞭で一部途切れた状態となっている。深さは深い部分で0.35m程を計る。2.5Y4/3オリーブ褐色泥砂等が堆積する。平安京の復原モデル60ではX-109.919.10～-109.919.59mが五町の六～七門の境目と推定されているので、この位置に近く行境の溝である可能性が高い。

##### 溝 326、328、333、336、373、585、586、615（図版4・9の1・10の2）

これらは東西方向の溝で、幅0.3～0.4mを測り、深さは残りのいい所では0.2m程である。部分的に残存するだけのものあるが、ほぼ等間隔で位置している。耕作に関係する溝である可能性が高い。これらの他に南北方向の同様な溝327、325、593などがある。

##### 土壙 311（図版4・9の1）

溝333を切って成立していた。東西0.75m、南北0.9m、深さ0.1m程で、2.5Y4/3オリーブ褐色泥砂が堆積しており、細かな炭の破片も認められた。10世紀代の土器が出土している。

#### 平安時代後期～鎌倉時代

整地層第3層をベースに成立していた遺構面である。この面では平安時代後期の遺構が最も古く、整地層第3層は11世紀～12世紀代と限定できる状況となっている。今回の調査では最も多くの遺構が検出された。大半は径0.3～0.4m程の柱穴で、底部に石が据えられているものもあった。建物として並びが確認できるものはない。

### 土壤 121 (図版3・8の2)

東西1.7m、南北1.3mの大きさで検出。10YR3/2黒褐色砂泥が堆積。順次掘り下げ、検出面から約0.2mのところで底部は東西2つに別れる。検出面より0.5mの深さとなった。甕を据えた穴である可能性が高い。13世紀前半代の遺構である。

### 土壤 287 (図版3・8の2・12の1)

東西0.7m、南北0.7mの規模で検出。25Y3/3暗オリーブ褐色砂泥が堆積していた。約0.05m掘り下げた所で平たい面を上にそろえた石敷き状のものを検出した。幅約0.4mほどで東西に延びていたものであろう。0.7mほどが残っているに過ぎない。12～13世紀代の遺構である。

### 土壤 238 (図版3・8の2)

東西0.8m、南北1.0m、深さ0.5m程を測る。25Y3/3暗オリーブ褐色砂泥が堆積する。12世紀代の遺構である。

### 井戸 564 (図版3・10の1)

調査区西部で検出。掘り方は一辺2.8m程の隅丸方形で、上部にコンクリート基礎が乗っていて危険なため、堀形の東側幅約1m程を検出面から約1.2m掘り下げたところで調査を断念した。掘り下げた範囲においては木枠等の施設は確認できなかった。中央部の施設の抜取穴部分は25Y3/1黒褐色泥砂、堀形部分には25Y4/2暗灰黄色～4/3オリーブ褐色泥砂等が堆積していた。12世紀から13世紀の土器が出土している。

### 鎌倉時代～室町時代

整地層代2層をベースに成立している遺構面である。整地層代2層は13世紀中頃のものと考えている。

### 土壤 45、60 (図版2・8の1・10の5)

土壤45は東西2.8m、南北2.3mを測る。深さは1.0mで、10YR3/4暗褐色砂泥が堆積し、底部壁沿いに柱を据えたと思われる石や、石が抜けた穴が数個確認されている。土壤60は土壤45から西壁が共通して延びてきており土壤45の南縁に幅1.2mで取りついている。南へは約2.0mである。10YR3/1黒褐色砂泥が堆積。取り付き部分で土壤60の底部は0.2mほど高い段が着く。徐々に南に向かい勾配が付いて土壤60底部南端はさらに0.2mほど高くなっている。土壤45は半地下式の室で土壤60は出入りするための施設の痕跡と考えられる。14世紀後半代の遺構である。

### 土壤 62 (図版2・8の1)

調査区北部中央で検出。東西0.7m、南北0.8m、深さ0.35mで、10YR3/1黒褐色砂泥が堆積していた。14世紀半ば頃の遺構である。

### 土壤 96 (図版2・8の1)

調査区中央部で検出。東西0.75m以上、南北1.05m以上、深さ0.2mで10YR2/2黒褐色砂泥が堆積する。14世紀前半代の遺構である。

### 土壤 526 (図版 2・9 の 3)

調査区北西部で検出。北側大半が土壤 525 に切られている。東西で 1.5m 程の規模がある。土壤 525 や 526 は下層にある井戸 564 の埋没に伴いできた凹みに堆積したものである可能性が高い。10YR3/1 黒褐色～同 4/1 褐灰色泥砂が堆積する。深さは 0.5 m である。これもコンクリート基礎があるため西側の調査を断念した。13 世紀前半代の遺構である。

桃山、江戸時代以降

整地層第 1 層をベースとして成立している遺構面である。

### 土壤 11 (図版 1・7 の 2)

調査区北壁際で検出、東西の最大幅は 3.2 m、南北は 1.15 m 以上、深さは検出面より 1.3 m 測る。遺構の壁がえぐるように掘られている事から土取穴である可能性が高い。17 世紀前半代の遺構と考えている。

### 井戸 3 (図版 1・7 の 2・10 の 3)

調査区北東部で検出。堀形は東西 1.2 m、南北 2.1 m である。江戸時代の瓦が多量に入っていた。井戸として使用したのち瓦礫の処理を行ったものと見られる。井筒は内径 0.85 m で、花崗岩の切石を用い、その堀形には拳大の礫が多量に使われている。井筒内は 36.4 m (検出面より 22 m) 掘り下げた所で危険なためそれ以上の調査は断念した。

### 井戸 18 (図版 1・7 の 2・10 の 4)

調査区北東部で検出。堀形は東西 1.75 m、南北 1.85 m である。花崗岩の切石を用いて井筒を組んでいる。内径は 0.75 m である。埋土は 10YR3/2 黒褐色泥砂とそれに灰が多く含まれ、また堀形にも同様な土が入っており石組みが弱い状態であった。この井戸についても危険が伴うため 36.5 m (検出面より 21 m) まで掘下げたまでにとどまる。

### 土壤 505 (図版 1・9 の 2)

調査区南西部で検出。東西 2.8m、南北 5.0 m 以上の大型の遺構で、2.5Y3/2 黒褐色泥砂が堆積し焼土や炭が入る。コンクリート基礎が乗っているため、全体を知ることができなかったが、底部は検出面より 1.5 m の所にある。遺物は中世、あるいはそれ以前のものが多いが、江戸時代のものも少量出土し、江戸時代前半頃の土取穴であると見ている。

## IV. 遺物

出土遺物は整理箱にして 124 箱ある。平安時代以前の縄文土器が若干量あり、他は平安時代の中期以降から、中世、桃山、江戸時代と各時代にわたる。主なものについて記述する。

なお、時代区分は平安京の土器編年をもとにおこなう。

### 土壤 605 出土土器（図版 13）

1～4 は縄文晩期の土器である。摩滅していて器表から調整痕は読み取れない。突帶の付かない鉢形土器と見ている。1988 年の左京三条四坊四町の調査でも縄文晩期の土器がまとまって出土しておりそれらの類品であろう。胎土の内側から内部は黒色で、器表が 7.5YR5/4 にぶい褐色系のもの（1・2）と 10YR8/3 浅黄橙色のもの（3・4）とがある。いずれも長石粒目立つ。

### 溝 364 出土土器（図 5）

土師器杯 A（5～6）、同甕（7）、黒色土器 A 類椀（8・9）が出土している。これらその他に図示できなかったが土師器竈片、須恵器甕、灰釉陶器椀の破片がある。土師器杯 A は口径 15.8～15.9 cm、器高 2.7～2.9 cm で色調は 7.5YR8/4～10YR8/4 浅黄橙色を呈す。土師器甕は口径 21.7 cm で、体部外面はハケメ後ナデ、内面はオサエの後ナデ。10YR7/3 にぶい黄橙色。口縁内側の一部には煤が付着する。黒色土器 A 類椀は口径 16.5～16.6 cm、器高 5.0 cm。色調は 8 が 2.5Y7/2 灰黄色、9 が 7.5YR7/4 にぶい橙色を呈す。内面はそれぞれ炭素が付着し、8 はミガキ痕が残る。平安京 II 期中段階に比定できる一群と見ている。

### 土壤 311 出土土器（図版 13、図 6）

土師器皿 A（10）、同杯 A（11）がある。10 は口径 12.0 cm、器高 1.7 cm、胎土は 10YR8/4 浅黄橙色、11 は口径 15.6 cm、器高は 2.8 cm、色調は 10YR8/3 浅黄橙色である。平安京 III 期古に比定できる。

### 土壤 238 出土土器（図版 13、図 7）

土師器皿 N 小（12～15）、同皿 N 大（16～20）、瓦器皿（21）、瓦器小椀（22）、同椀（23・24）、輸入磁器白磁栓（25）、輸入磁器白磁椀（26）が出土している。土師器皿 N 小は口径が 8.5



図 6 土壌 311 出土土器  
実測図（1/4）

図 5 溝 364 出土土器実測図（1/4）

cm ~ 10.5 cm、器高は 1.6 ~ 2.0 cm を測る。色調は 12 が 7.5YR8/4 浅黄橙色、13 が 10YR7/4 にぶい黄橙色、14 が 10YR7/3 にぶい黄橙色、15 が 2.5Y7/2 灰黄色を呈す。土師器皿 N 大は口径 14.2 ~ 15.3 cm、器高は 2.4 ~ 2.9 cm で、16 が 2.5Y7/2 灰黄色、17 が 10YR8/2 灰白色、18 が 10YR8/3 浅黄橙色、19 が 2.5Y8/3 淡黄色、20 が 10YR8/4 浅黄橙色となっている。瓦器皿は口径 10.0 cm、器高 1.5 cm であり、内面に粗い暗文を施す。胎土は 7.5Y8/2 灰白色。瓦器碗は口径 8.6 cm、器高 3.0 cm である。高台が付き、色調は 7.5Y5/1 灰色 ~ 2.5Y8/2 灰白色。瓦器碗は口径 14.5 ~ 15.7 cm、器高 4.9 ~ 5.0 cm。胎土は 7.5Y8/1 灰白色で精良。内面はミガキ、画面は粗いミガキとなっている。輸入磁器白磁栓は最大径 3.2 cm、器高は 1.1 cm、輸入磁器白磁碗は口径 14.5 cm を測る。平安京 V 期新。

#### 土壤 121 出土土器（図 8）

土師器皿 N 小（27 ~ 30）、同皿 N 大（31・32）、白色土器高杯（33）、瓦器皿（34）、瓦器碗（35）輸入磁器碗（36 ~ 39）が出土している。土師器皿 N 小は口径 9.2 ~ 9.7 cm、器高 1.5 ~ 2.0 cm、

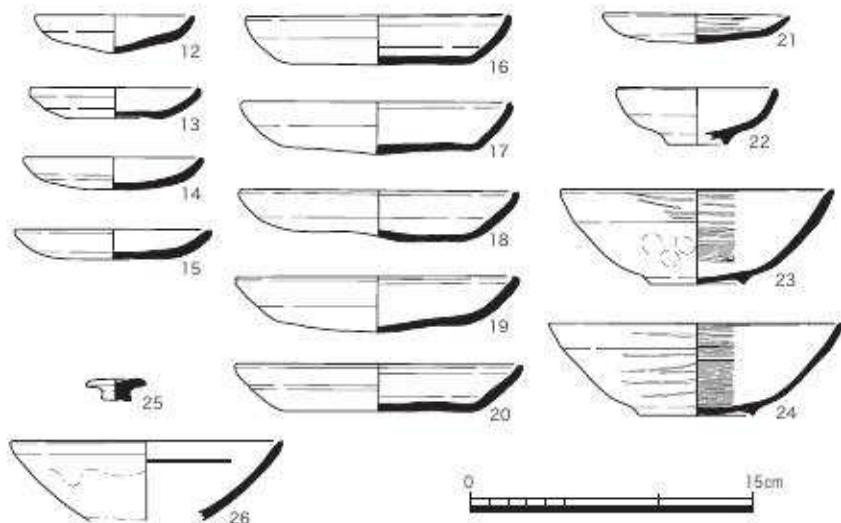


図 7 土壌 238 出土土器実測図（1 / 4）

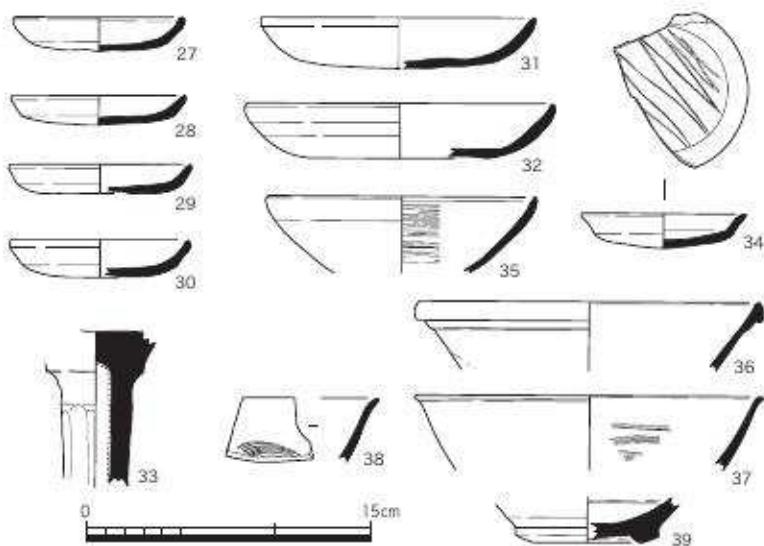


図 8 土壌 121 出土土器実測図（1 / 4）

色調は 27・29・30 が 10YR7/3 にぶい黄橙色、28 が 2.5Y7/3 浅黄色。土師器皿 N 大 31 が口径 14.6 cm、器高 2.7 cm、色調は 10YR7/3 にぶい黄橙色、32 は口径 16.5 cm、器高 2.9 cm、10YR8/3 浅黄橙色を呈す。白色土器高杯の色調は 2.5 Y 8/2 灰白色である。瓦器皿 34 は口径 8.8 cm、器高 1.8 cm、同椀は口径 14.5 cm、色調は両者とも N5/0 灰色である。輸入磁器白磁椀は 36 が口径 18.6 cm、37 は 18.5 cm を測る。京都 VI 期古（～中）。

#### 土壤 526 出土土器（図版 13、図 9）

土師器皿 Ac (40)、同皿 N 小 (41～45)、同皿 N 大 (46～51)、瓦器羽釜 (52)、瓦器火鉢 (53)、須恵器鉢 (54) が出土している。土師器皿 Ac は口径 9.2 cm、器高 1.3 cm、同皿 N 小は口径 8.9～9.5 cm、器高 1.5～1.7 cm、同皿 N 大は口径 13.2～15.8 cm、器高 2.1～2.9 cm となっている。色調は 40・41・45・47～50 が 10YR7/3 にぶい黄橙色、42・46・51 は 10YR7/4 にぶい黄橙色、43 が 10YR7/2 にぶい黄橙色、44 が 10YR8/3 浅黄橙色である。瓦器羽釜は口径 20.0 cm、羽径は 25.4 cm、外面に煤付着。胎土は 7.5Y8/1 灰白色。瓦器火鉢は口径 32.0 cm。内面はハケメの痕跡が残る。内外面に炭素吸着。須恵器鉢は口径 30.0 cm。播磨産と見られる。京都 VI 期中。

#### 土壤 96 出土土器（図版 14、図 10）

土師器皿 N 小 (55～57)、同皿 N 大 (58～60)、同皿 Sh (61～63) が出土している。土師器皿 N 小は口径 7.9～8.6 cm、器高 1.3～1.9 cm、同皿 N 大は 11.3～11.5 cm、器高 1.9～2.1 cm、同

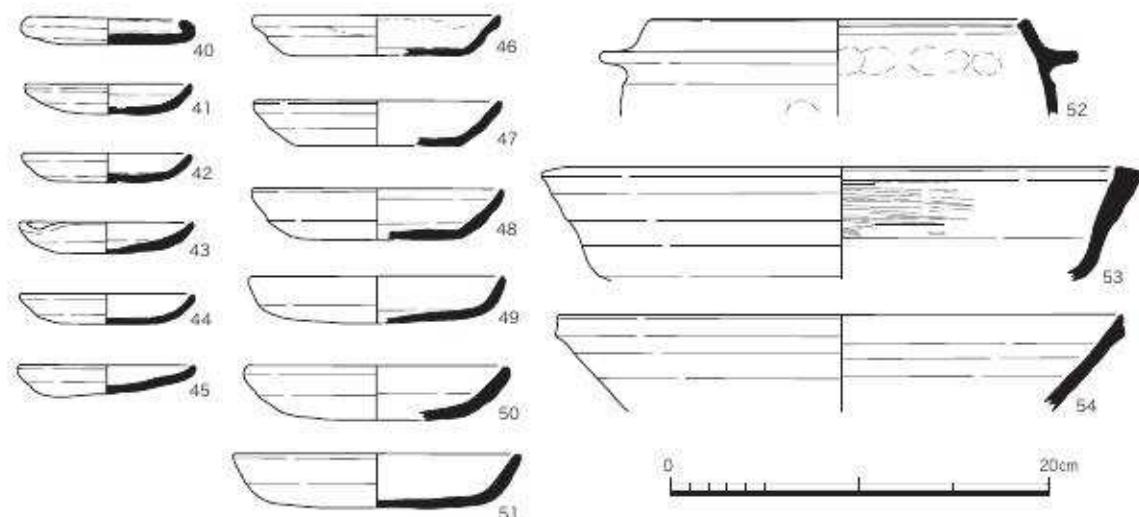


図 9 土壌 526 出土土器実測図 (1 / 4)

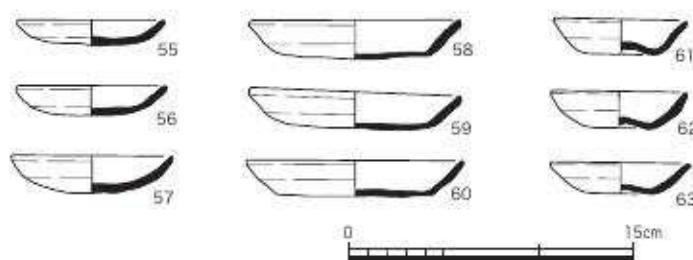


図 10 土壌 96 出土土器実測図 (1 / 4)

皿 Sh の口径は 7.2 ~ 7.5 cm、器高 1.7 ~ 1.9 cm である。色調は 55 ~ 60 が 10YR7/3 にぶい黄橙色、61・62 は 2.5Y7/2 灰黄色、63 は 25Y8/2 灰白色となっている。京都Ⅶ期中。

#### 土壌 62 出土土器 (図版 14、図 11)

土師器皿 N 小 (64・65)、土師器皿 N 大 (66・67)、土師器皿 S 小 (68・69)、土師器皿 S (70・71)、瓦器羽釜 (72)、瓦器火鉢 (73) が出土している。土師器皿 N 小は口径 8.0 ~ 8.1 cm、器高 1.4 ~ 1.6 cm、土師器皿 N 大は口径 11.0 ~ 11.2 cm は器高 1.7 ~ 2.1 cm、土師器皿 S 小は口径 7.1 ~ 7.3 cm、器高 1.7 ~ 2.0 cm、土師器皿 S は口径 11.2 ~ 12.6 cm である。色調は 64・65 が 2.5Y7/2 灰

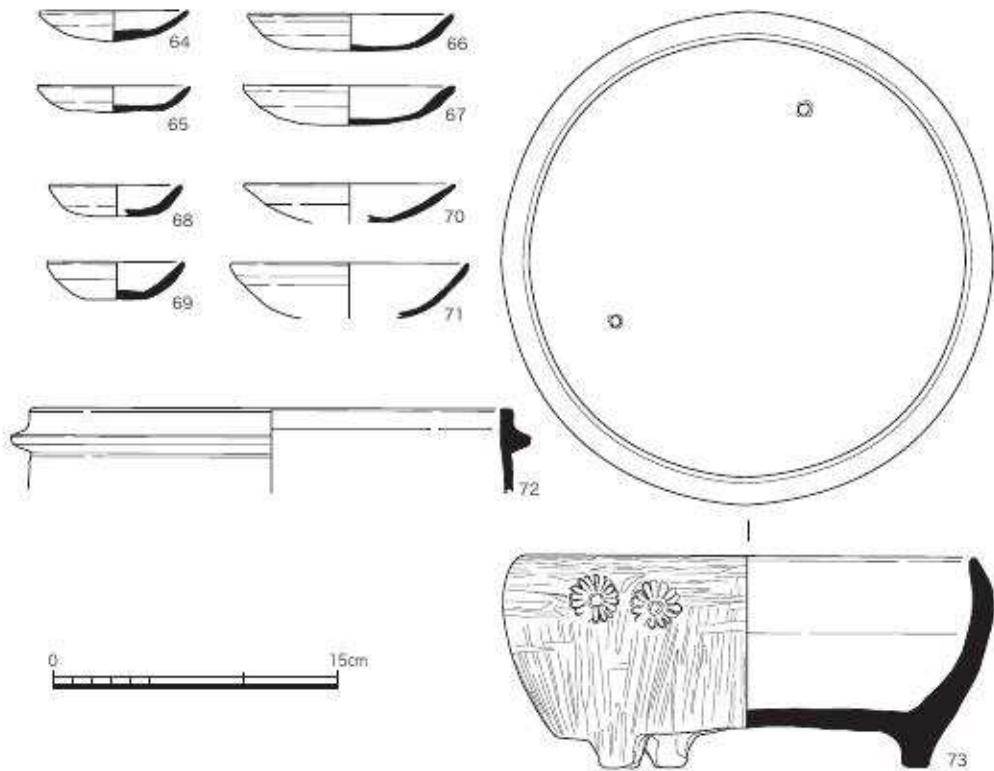


図 11 土壌 62 出土土器実測図 (1 / 4)

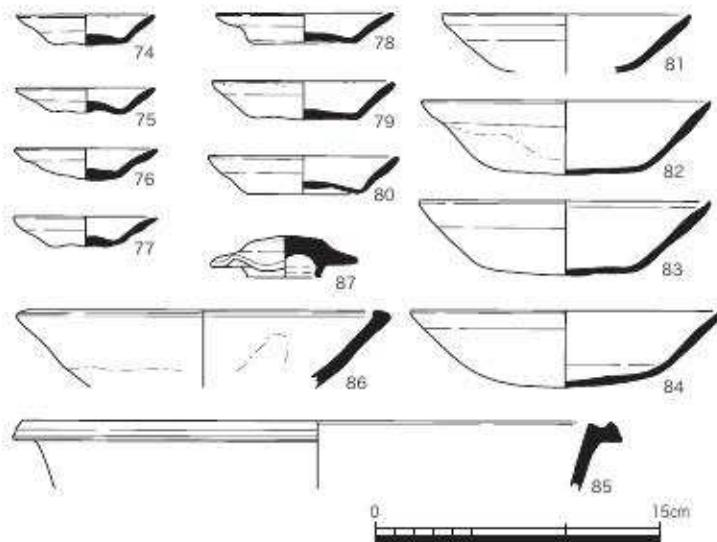


図 12 土壌 45 下層出土土器実測図 (1 / 4)

黄色、66・67は10YR7/3にぶい黄橙色、68は10YR8/2灰白色、69～71は2.5Y8/2灰白色である。

瓦器羽釜は口径25.6cm、胎土は2.5Y8/1灰白色。瓦器火鉢は最大径26.0cm、器高は11.3cmである。外面はミガキ、体部上位に菊花文の2連のスタンプを六方向に施す。底部の三方向に足を付ける。底部二ヶ所に焼成後に小穴を穿つ。胎土は5Y8/1灰白色を呈す。京都Ⅷ期新。

#### 土壤45下層出土土器（図版14、図12）

土師器皿N小（74～77）、土師器皿N大（78～80）、土師器皿S（81～84）、瓦器鍋（85）、瀬戸灰釉系皿（86）、輸入磁器青磁蓋（87）が出土している。

土師器皿N小は口径7.3～7.7cm、器高1.3～1.6cm、土師器皿N大は口径9.5～10.1cm、器高1.6～2.0cm、土師器皿Sは口径13.2～16.6cm、器高3.0～4.0cm。色調は74が10YR7/4にぶい黄橙色、75・78・79・81は7.5YR7/4にぶい橙色、76は5YR6/6橙色、77は7.5YR7/6橙色、80は5YR7/4にぶい橙色、82は2.5Y8/3浅黄色、83は10YR8/2灰白色、84は10YR8/3浅黄橙。瓦器鍋は口径32.3cm、胎土は7.5Y6/1灰色。瀬戸灰釉系皿は卸し目皿と見られる。口径は19.9cm、胎土は2.5Y7/3浅黄色、釉は5Y6/2灰オリーブ色。輸入磁器青磁蓋は最大径7.8cm、器高2.2cm。胎土は7.5Y7/1灰白色、釉は10Y6/2オリーブ灰色である。壺の蓋である。京都Ⅷ期古。

#### 土壤11出土土器（図版15、図13）

土師器皿Nr（88～90）、同皿Sb（91～94）、同皿S（95～99）、土師器羽釜（100）、土師器焰烙鍋（101）、塩壺蓋（102）、塩壺身（103）、美濃瀬戸系灰釉小皿（104）、同志野丸皿（105）、同志野菊皿（106）、同灰釉椀（107～109）、同天目椀（110～111）、同志野向付（112）、同織部向付（113・114）、唐津鉄釉椀（115）、唐津皿（116～119）が出土している。

土師器皿Nrは径6.6～7.6cm、器高1.4～1.5cm、同皿Sbは口径9.8～10.4cm、器高1.9～2.5cm、同皿Sは口径11.4～12.4cm、器高1.9～2.4cmを測る。色調は88・89・91・93・94・98は10YR7/3にぶい黄橙色、90が2.5Y7/3浅黄色、92・95・96は10YR7/4にぶい黄橙色、97が10YR6/3にぶい黄橙色、99は7.5YR6/4にぶい橙色を呈す。土師器羽釜口径16.1cm、胎土は7.5YR6/4にぶい橙色、同焰烙鍋は口径32.0cm、胎土は10YR7/2にぶい黄橙色、外面器表は10YR3/1黒褐色を呈する。塩壺蓋は口径7.7cm、器高2.3cm、塩壺身の口径は5.5cm、器高8.3cm、両者とも色調は7.5YR7/4にぶい橙色である。美濃瀬戸系灰釉小皿の口径は6.1cm、器高1.9cm、色調は胎土が5Y5/1灰色、釉が7.5Y6/2灰オリーブ色を呈す。志野丸皿は口径11.7cm、器高2.3cm、胎土は5Y8/1灰白色、釉は5Y8/2灰白色に発色。志野菊皿は口径12.8cm、器高3.1cm、胎土は2.5Y6/1黄灰色、釉は5Y7/1灰白色に発色。美濃瀬戸系灰釉椀は口径10.6～11.3cm、109は器高6.6cm。胎土は2.5Y8/1灰白色、釉は5Y5/6オリーブ色系を呈する。美濃瀬戸系天目椀は口径10.8～11.4cm、器高は5.7～6.6cm、胎土は2.5Y8/2灰白色、釉は7.5YR2/1黒色～10YR2/2黒褐色。志野向付112は口径14.6cm、器高4.5cm、胎土は2.5Y7/3浅黄色、釉は2.5Y7/2灰黄色に発色。織部向付113は口径が14.2cm、胎土2.5Y8/2灰白色、釉は2.5Y7/4浅黄色を呈する。織部向付114は口縁端部を欠く。色調は5Y7/1灰白色に発色、透明に近い釉である。内面外面に鳥、草花の絵を施す。唐津椀は口径11.3cm、器高6.1cm、胎土は7.5YR6/6橙色、釉は7.5YR2/2黒

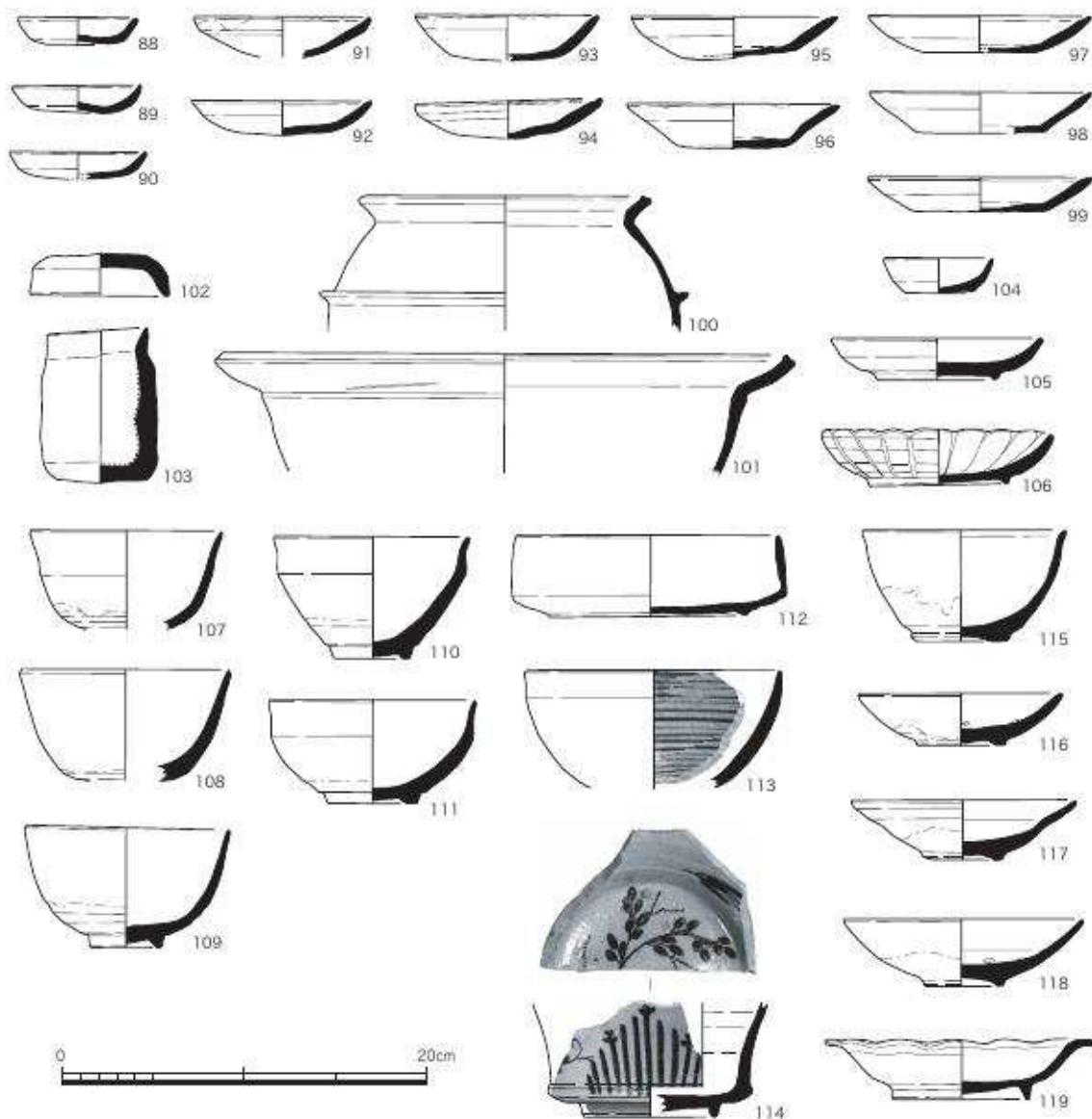


図13 土壌11出土土器実測図（1/4）

褐色を呈する。唐津皿116～118は口径11.3～13.2cm、器高3.2～3.9cm。色調は116の胎土が5Y6/1灰色、釉は5Y5/2灰オリーブ色、117は胎土が2.5Y7/3浅黄色、釉は2.5Y6/2灰黄色に発色、118は胎土が7.5YR7/3にぶい橙色、釉は5Y6/2灰オリーブ色である。唐津皿119は口径が14.8cm、器高は3.3cmで、波状の口縁をもつ。胎土は2.5Y6/1黄灰色、釉は5Y6/2灰オリーブ色を呈する。京都XI期中（～新）。

#### 石製品

#### 温石（図14）

土壌11から出土したもので、滑石の鍋から転用したものと思われる。幅6.8cm、残存長6.8cm、厚さ約1.0～1.3cmを測る。

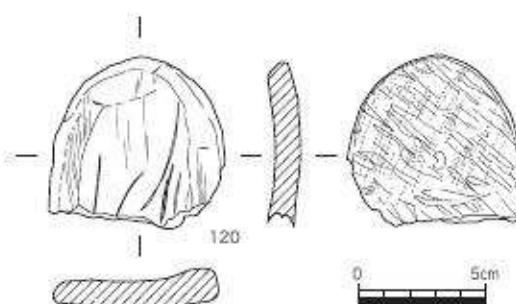


図14 土壌11出土石製品実測図（1/3）

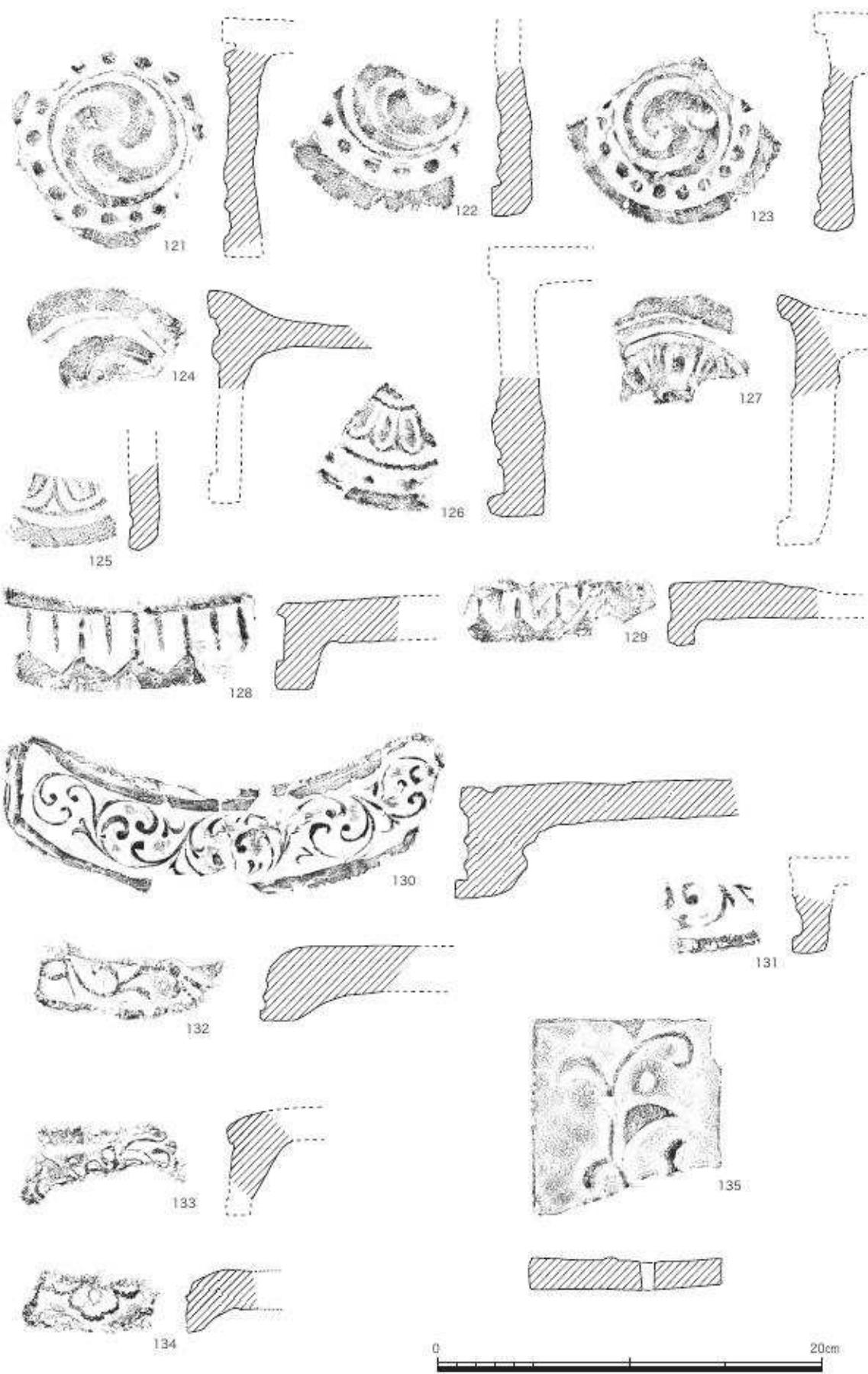


図 15 出土瓦拓影・実測図 (1 / 3)

## 瓦類（図版 16、図 15）

### 巴文軒丸瓦（121～124）

121は土壙557出土で色調は10YR8/2灰白色で径1～3mmの石粒含む。122は整地層第2層出土、色調は2.5Y8/1灰白色で径0.5～2mmの石粒含む。123は整地層第1層出土、色調は7.5Y8/1灰白色を呈す。径1～3mmの石粒含む。124は7.5Y5/1灰色を呈し径1.5～2mmの石粒を含む。土壙112出土。

### 蓮華文軒丸瓦（125～127）

125は2.5Y8/2灰白色。土壙140出土。126はN5/0灰色焼成やや不良。整地層第3層出土。127は7.5Y6/1灰色で焼成は良好。整地層第2層出土。

### 剣頭文軒平瓦（128・129）

128は整地層第2層出土、色調はN3/0暗灰色を呈する。129は土壙63出土、色調は2.5GY8/1灰白色。

### 唐草文軒平瓦（130～133）

130は柱穴109から出土。色調は2.5GY8/1灰白色～N5/0灰色。径1～4mm程の砂粒含む。131は整地層第2層出土。色調はN5/0灰色。132は整地層第3層出土、色調は10YR8/3浅黄橙色。1mm程の砂粒が混じる。133は土壙121出土、色調は2.5Y8/2灰白色0.5～2mm程の砂粒含む。

### 花菱文軒平瓦（134）

134は土壙59出土、5Y7/1灰白色、1～2.5mm程の石粒混じる。

### 草木文垂先瓦（135）

土壙11より出土。幅9.8cm、残存長10.2cm。胎土の色調は5Y5/1灰色。厚さは1.5cm程である。器表は全面に炭素が吸着する。

## V. 小 結

当調査地は左京三条三坊五町に位置しているが、同町の東隣（左京三条三坊十二町）には「三条西殿」があり、南東（左京四条三坊九町）には三条烏丸殿、三条烏丸御所、三条桟敷殿など「三条南殿」の名で総称することもある邸宅があった。両邸宅とも白河法皇、鳥羽上皇、待賢門院藤原璋子らが生きた12世紀前半代の「御所」として利用された施設である。四条三坊九町の調査では玉石を敷き詰めた庭園の遺水遺構が見つかっており、今回の調査地はそのすぐ西側に当たり、遺構の残存状況が注目された。

今回の調査では縄文晩期の土器の破片や平安時代の前期（9世紀後半頃）の町割りに関連する溝など注目すべき遺構遺物が出土している。また、七門にあたる部分では耕作に関連すると思われる溝も検出されており、平安京京域内での土地利用の一端も見る事ができた。当地では12世紀に0.2～0.3m程の厚さで整地土が入れられておりその上面で左京域の中心部ではよく見られるおびただしい数の柱穴群が展開する。以後鎌倉、室町時代と整地を繰り返しつつ土地利用がさ

れていったものと見られる。

全体の地勢としては西側の西洞院通へ向かい下っていく状況であり、東側の「御所」が成立した部分よりも低い地域であったが、整地を繰り返し発展していった様子を知る事ができた。

註1 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年」『研究紀要第3号』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1996年

註2 「平安京左京三条四坊四町 京都市中京区最華院前ノ町」『京都文化博物館（仮称）調査研究報告第2集』財團法人京都文化財団 1988年

遺物概要表

時代	内容	コンテナ数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
縄文時代	縄文土器		縄文土器4点		
平安時代後期以前	土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、輸入陶磁器、瓦器、瓦		土師器5点、黒色土器2点		
平安時代後期～鎌倉時代	土師器、須恵器、瓦器、輸入陶磁器、錢貨、瓦		土師器15点、白色土器1点、瓦器6点、輸入磁器白磁6点、軒先瓦14点		
鎌倉時代～室町時代	土師器、須恵器、瓦器、輸入陶磁器、錢貨、瓦		土師器40点、須恵器1点、瓦器5点、瀬戸灰釉陶器1、輸入磁器白磁1点		
桃山時代以降	土師器、国産施釉陶磁器、焼締陶器、瓦器、錢貨、瓦		土師器16点、美濃瀬戸系陶器11点、唐津系陶器5点、温石1点、瓦1点		
合計		128箱	135点(4箱)	124箱	0箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より4箱多くなっている。

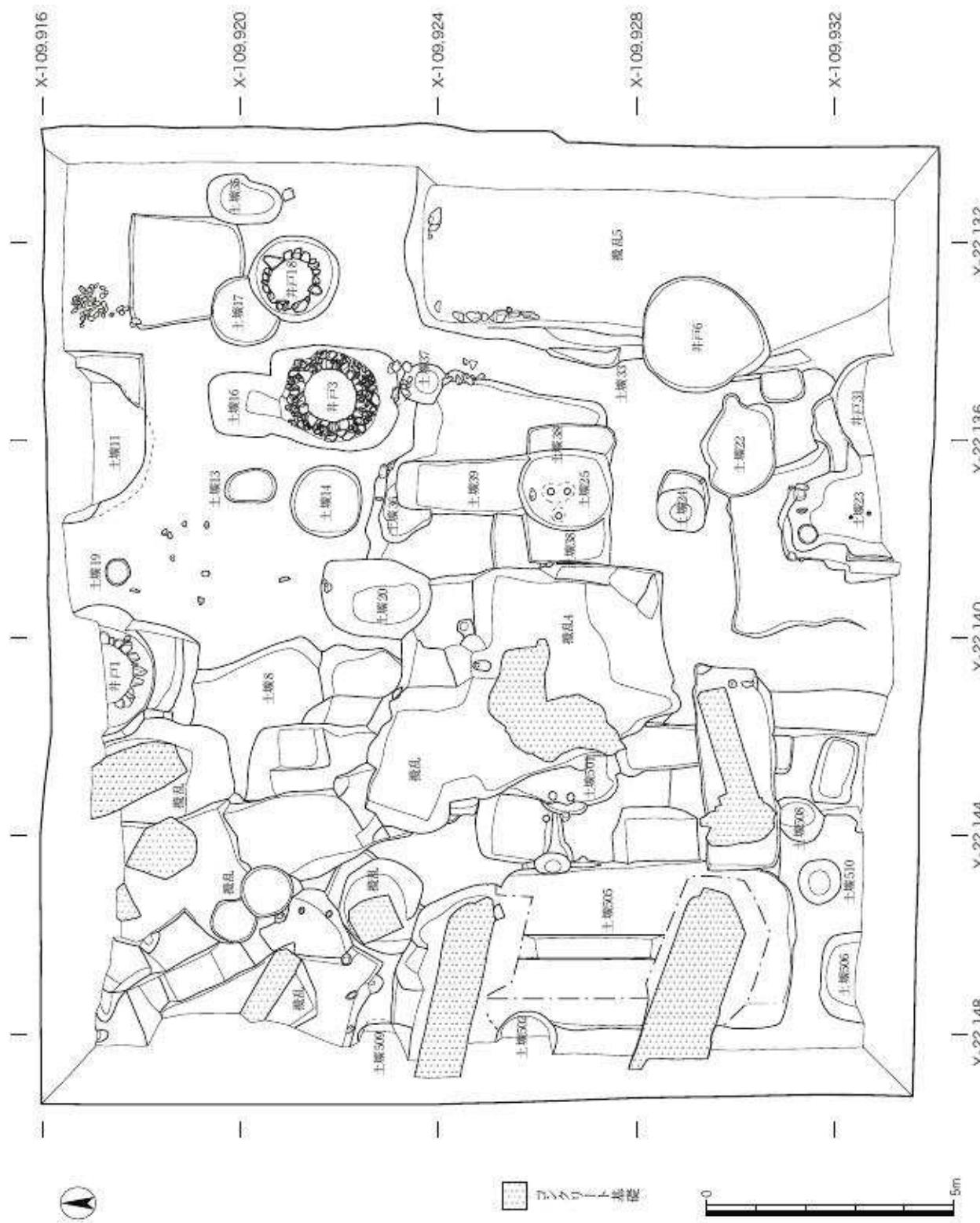
## 報告書抄録

ふりがな	へいあんきょうさきょうさんじょうさんほうごちょう・からすまおいけいせき							
書名	平安京左京三条三坊五町・烏丸御池遺跡							
副書名								
卷次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	上村憲章							
編集機関	古代文化調査会							
所在地	〒 658-0032 神戸市東灘区向洋町中1丁目4番地 125-1404							
発行年月日	2011年3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
平安京左京 三条三坊五 町・烏丸御 池遺跡	京都市中京区 衣櫛町 55	26100		35度 00分 32秒	135度 45分 27秒	2010.10.08 ～ 2010.12.20	360 m <sup>2</sup>	医療教育施 設建設
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
平安京左京 三条三坊五 町・烏丸御 池遺跡	都城跡・集落跡	縄文～古墳時代 平安時代～近世	溝、土壙、柱穴	土師器杯・皿、 須恵器、綠釉陶 器、灰釉陶器、 黒色土器、輸入 陶磁器、瓦類				

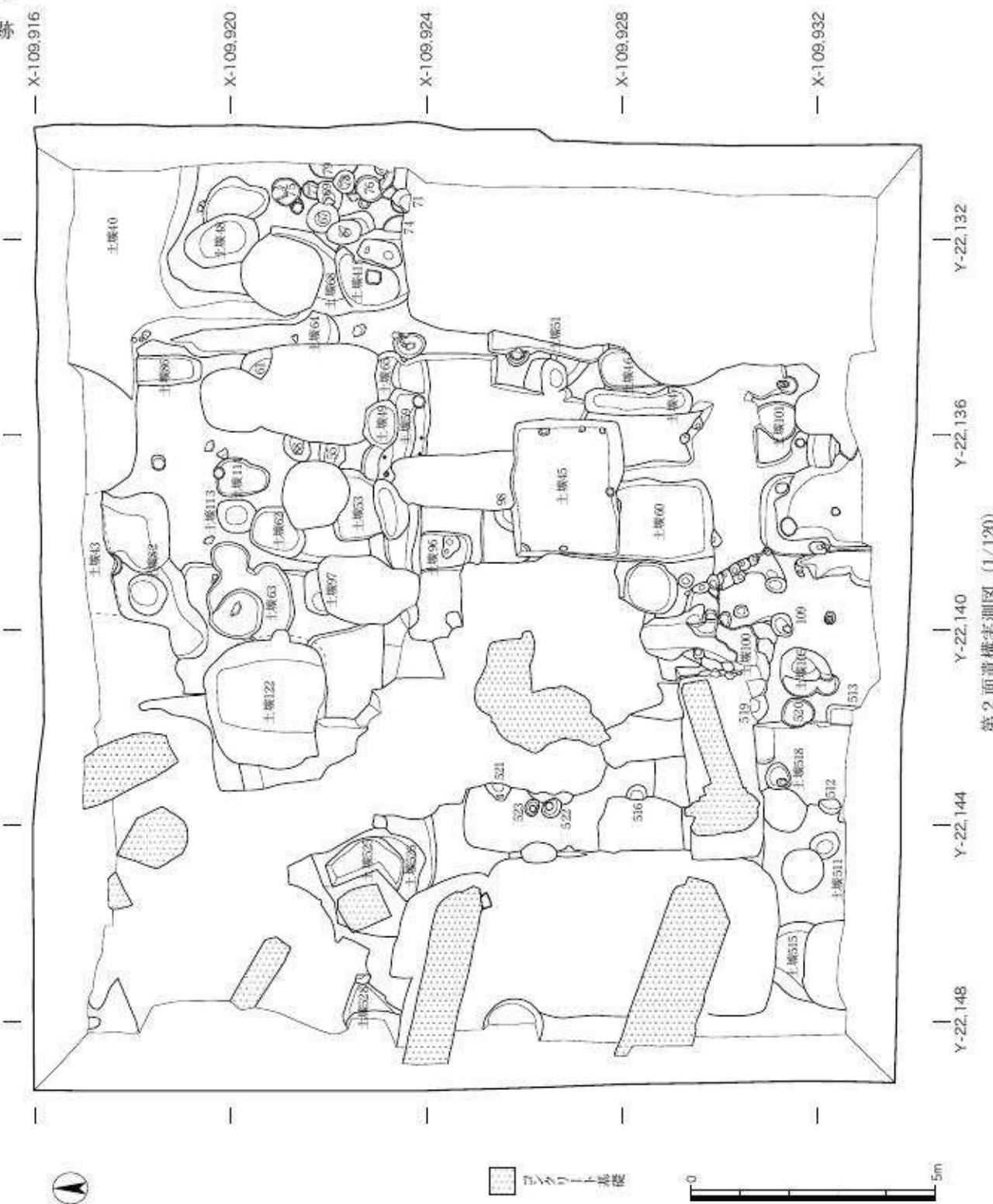


# 図 版

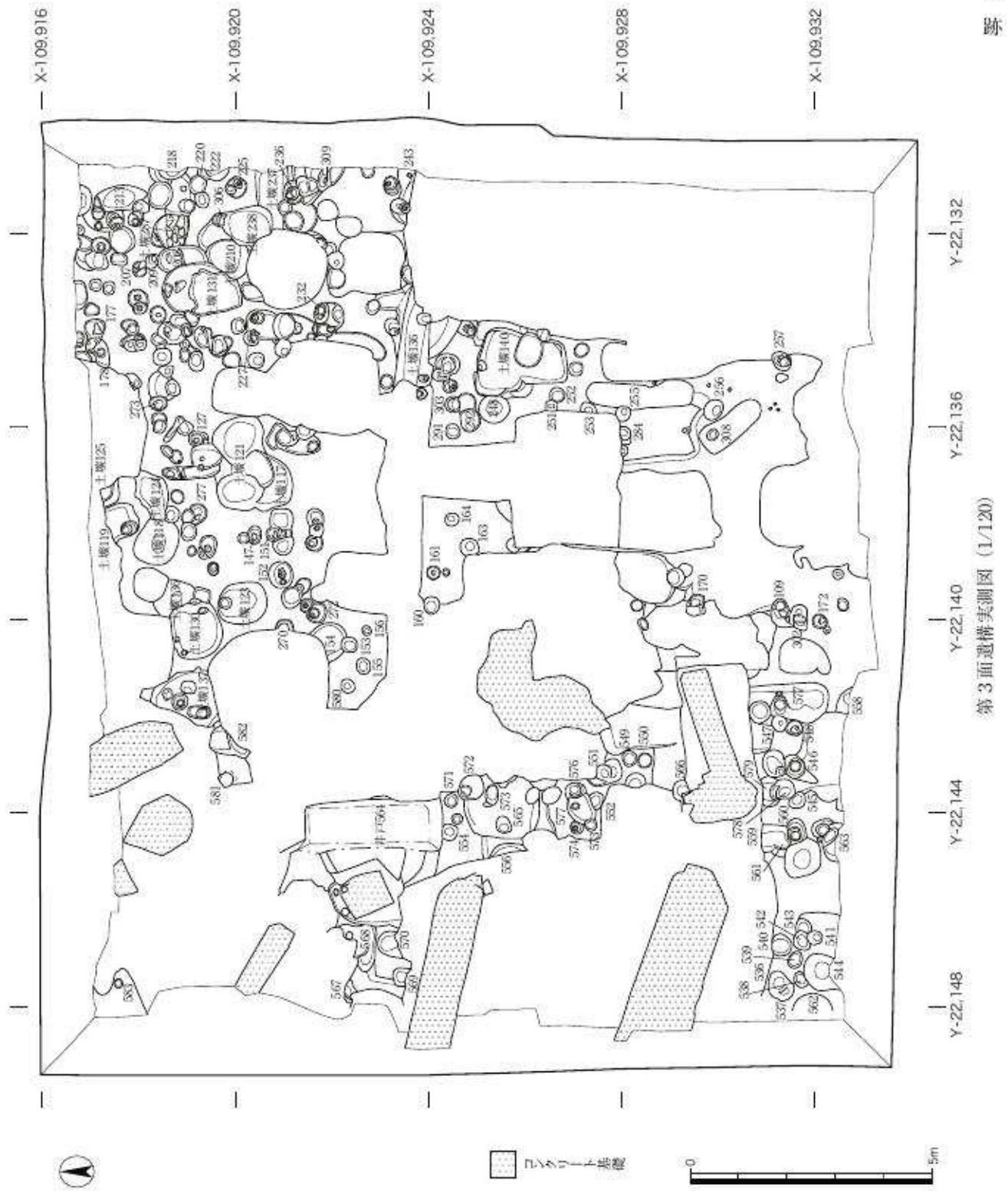


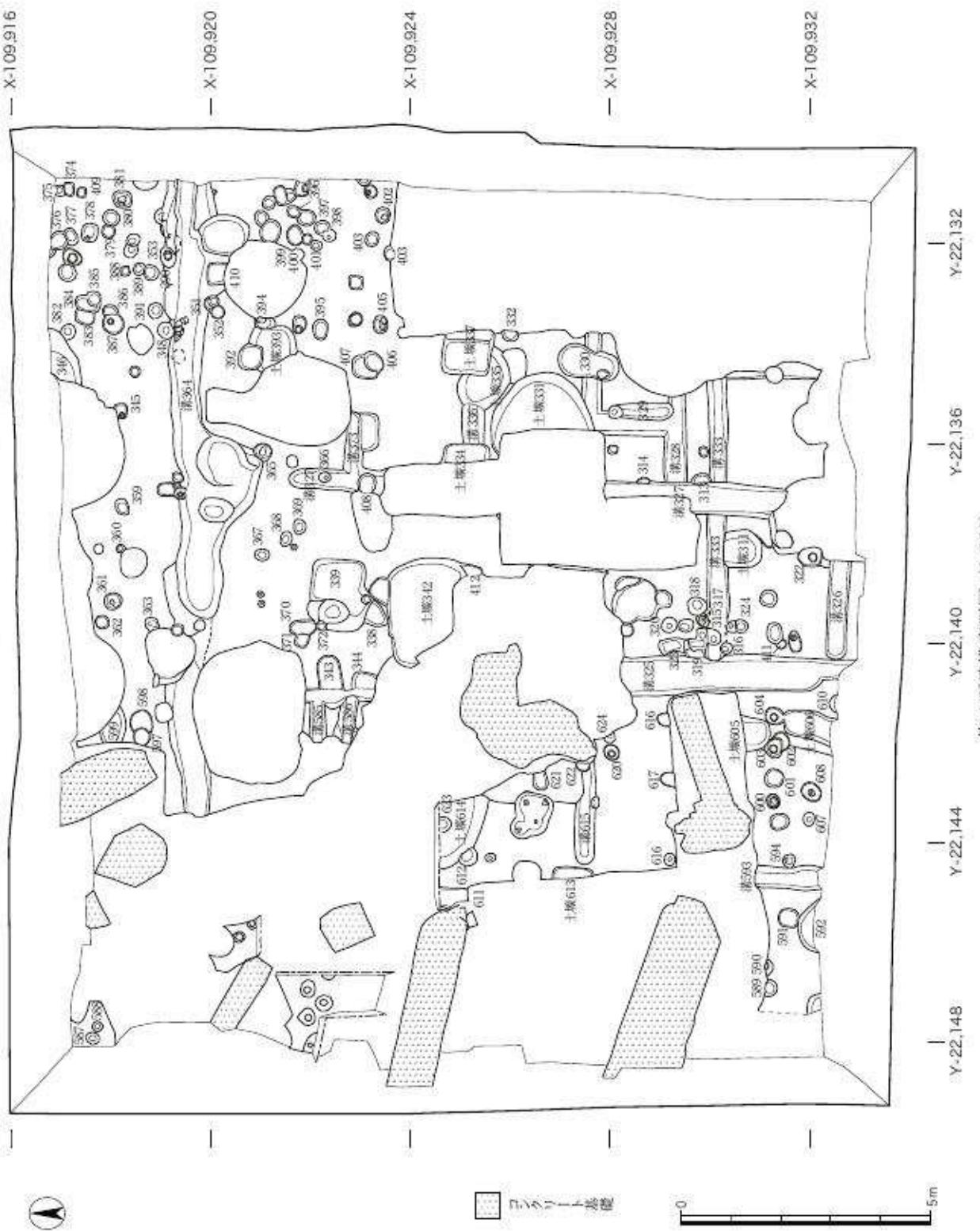


第1面造構実測図(1/120)



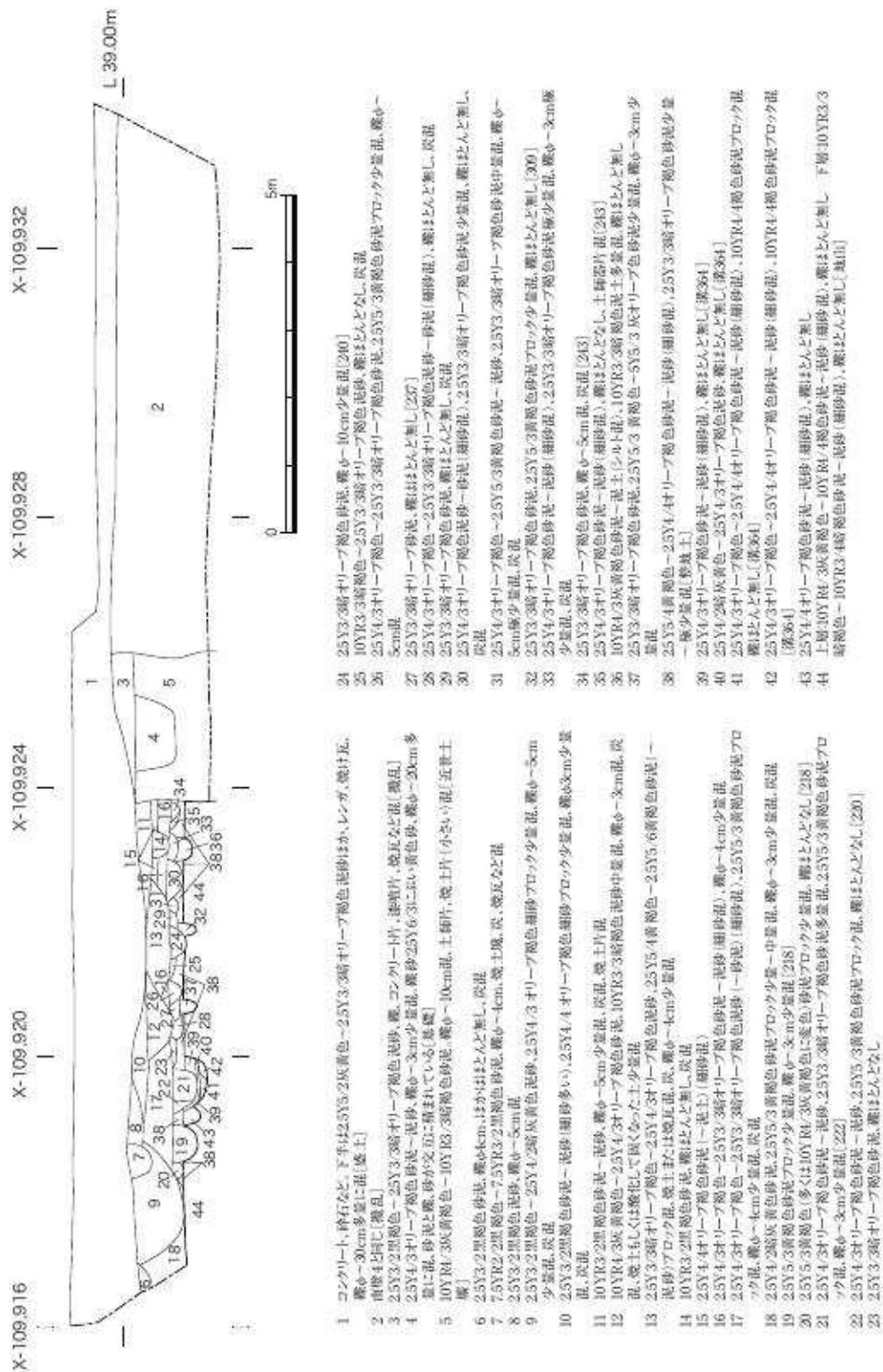
第2面道構造測図 (1/120)

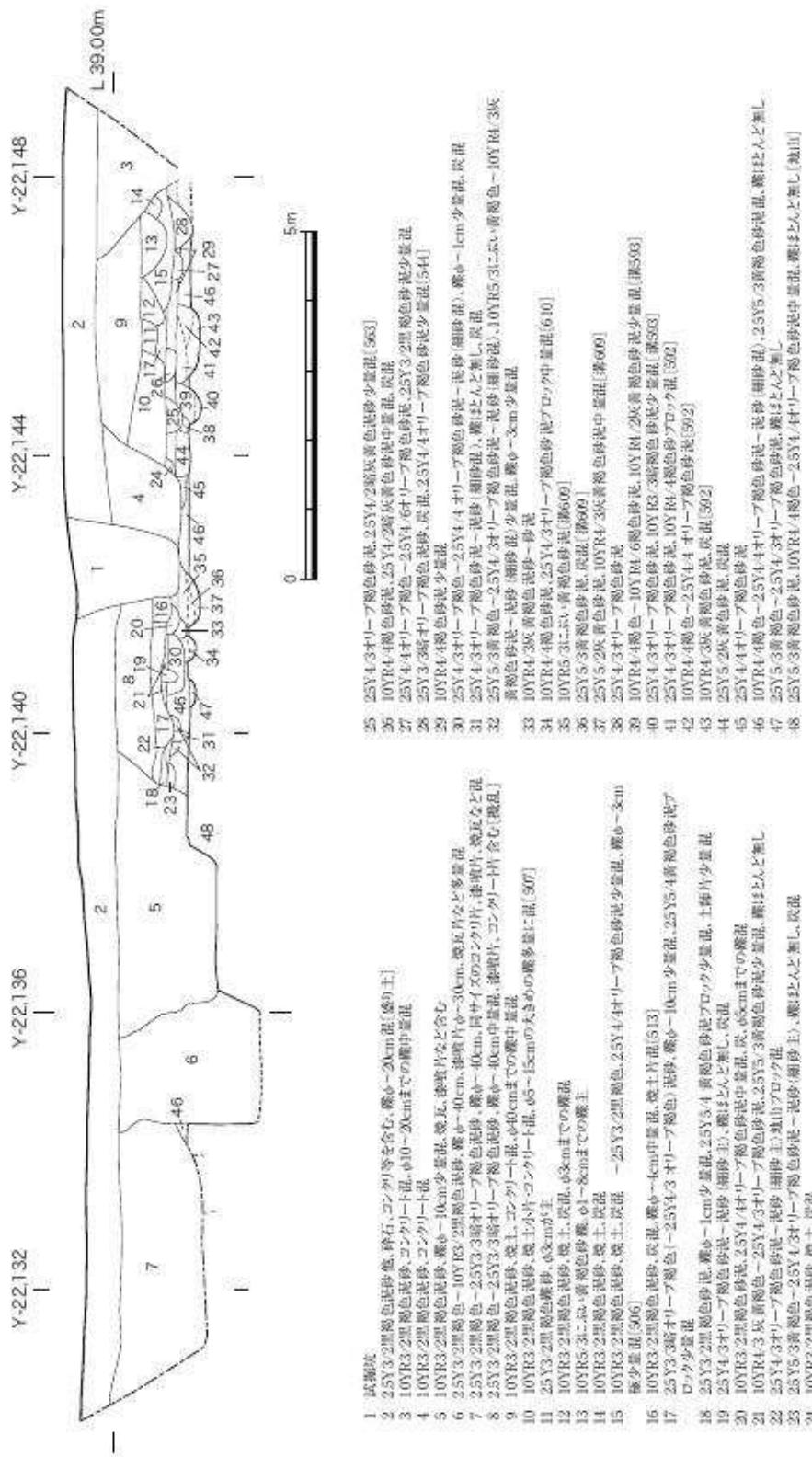




第4面遺構実測図 (1/120)

東壁実測図 (1/100)





南壁実測図 (1/100)



1 調査地近景（南東から）



2 東区第1面全景（南東から）



1 東区第2面全景（南東から）



2 東区第3面全景（南東から）



1 東区第4面全景（南東から）



2 西区第1面全景（北から）



3 西区第2面全景（北から）



1 西区第3面全景（北から）



2 西区第4面全景（北から）



3 第1面井戸3（東から）



4 第1面井戸18（東から）



5 第2面土壙45（北東から）



6 第2面柱穴69（北から）



1 第2面柱穴 75（北から）



2 第2面土壙 63下層（北から）



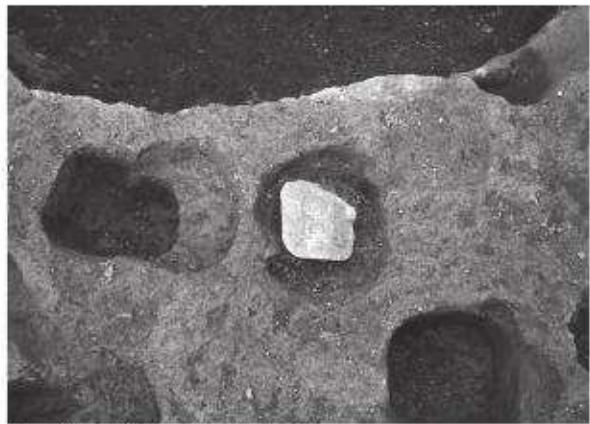
3 第2面土壙 122（西から）



4 第3面柱穴 172（北から）



5 第3面手前から柱穴 109、302、172（北から）



6 第3面柱穴 273（南から）



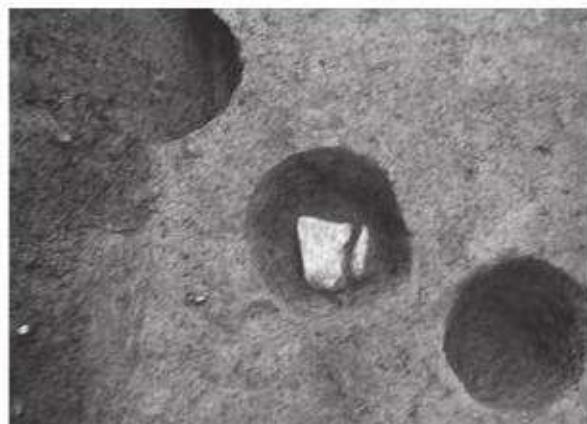
7 第3面柱穴 297（北から）



8 第3面手前から柱穴 207、209、208（北から）



1 第3面土壙 287 (北から)



2 第4面柱穴 381 (北から)



3 第4面柱穴 405 (北から)



4 第4面溝 364 土器出土状況 (北から)



5 第4面溝 364 堆積状況 (西から)



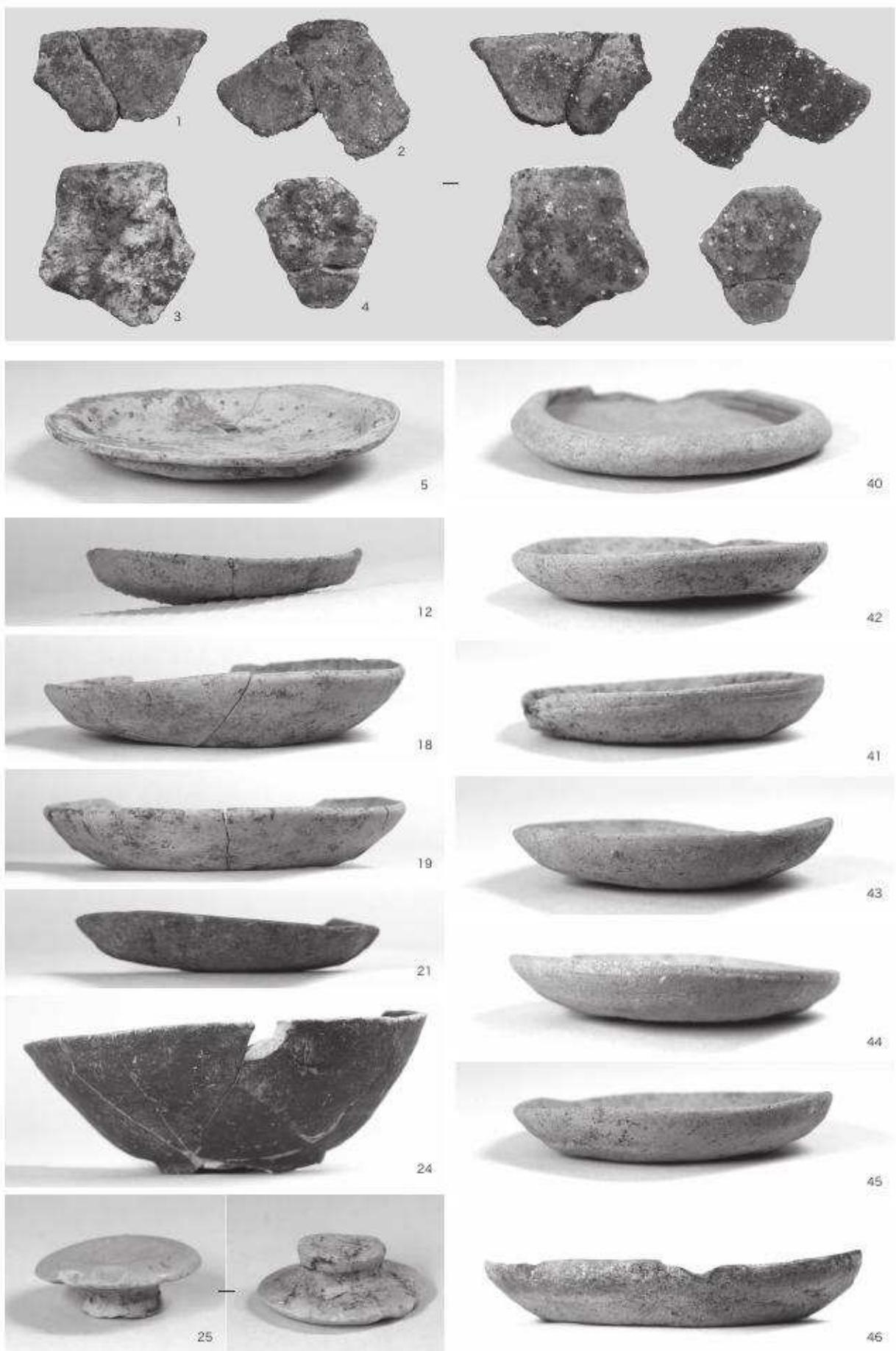
6 第4面土壙 605 (北から)



7 X-109.924.5m 部分断割り状況 (南東から)

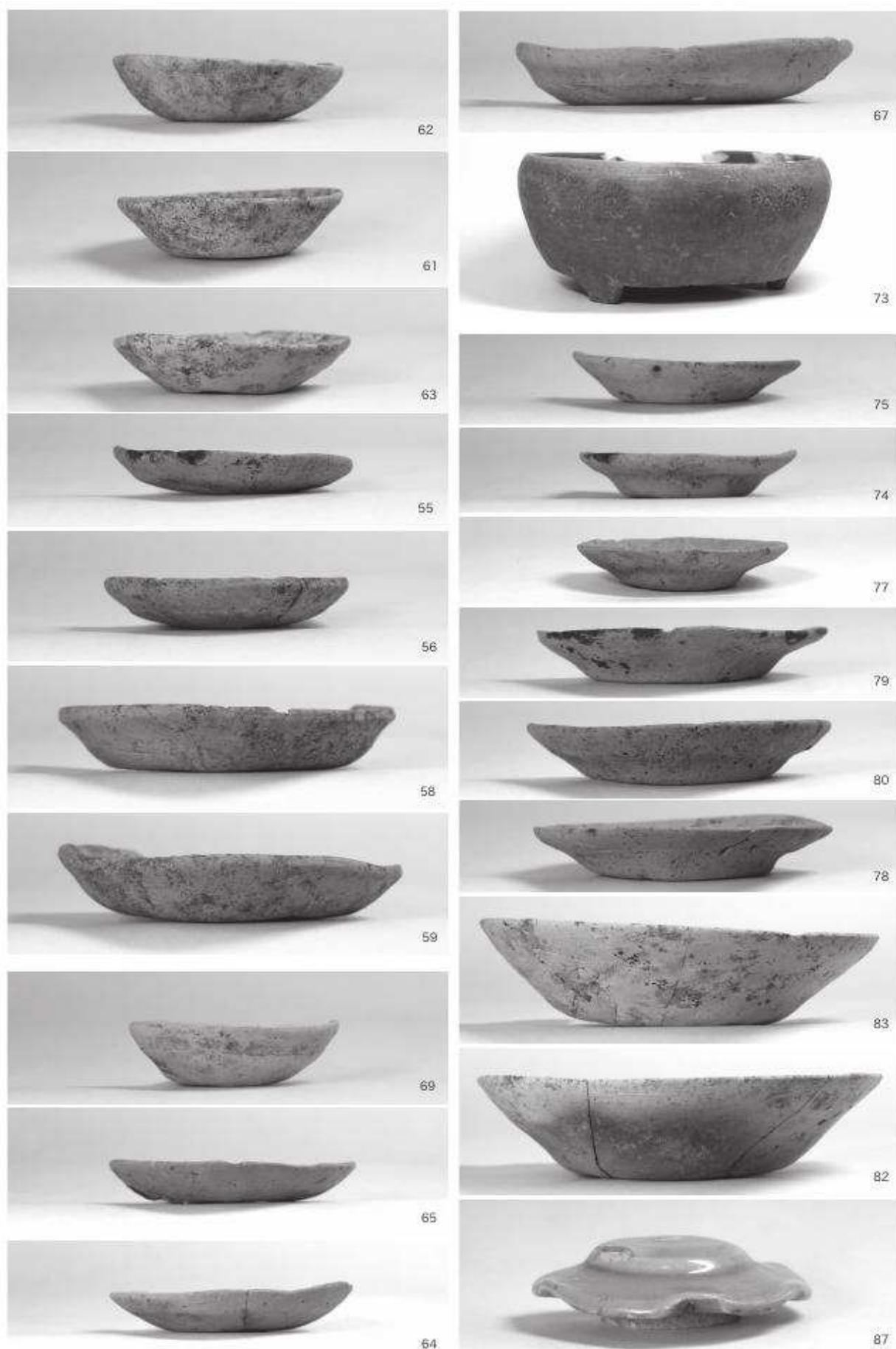


8 調査区南壁西半部堆積状況 (北から)

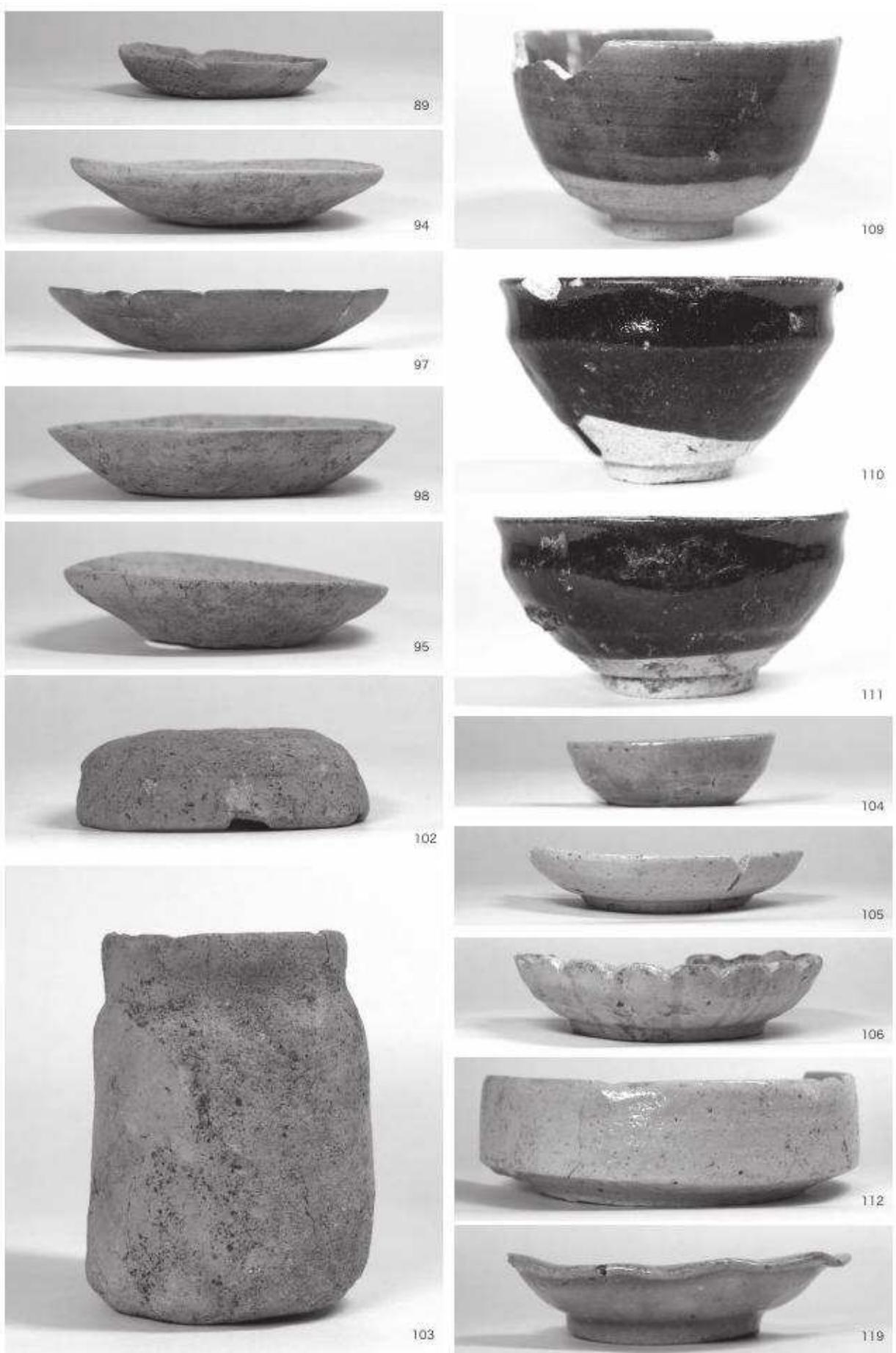


土壤 605 (1~4)・土壤 311 (5)・土壤 238 (12・18・19・21・24・25)・土壤 526 (40~46) 出土遺物

圖版十四  
遺物

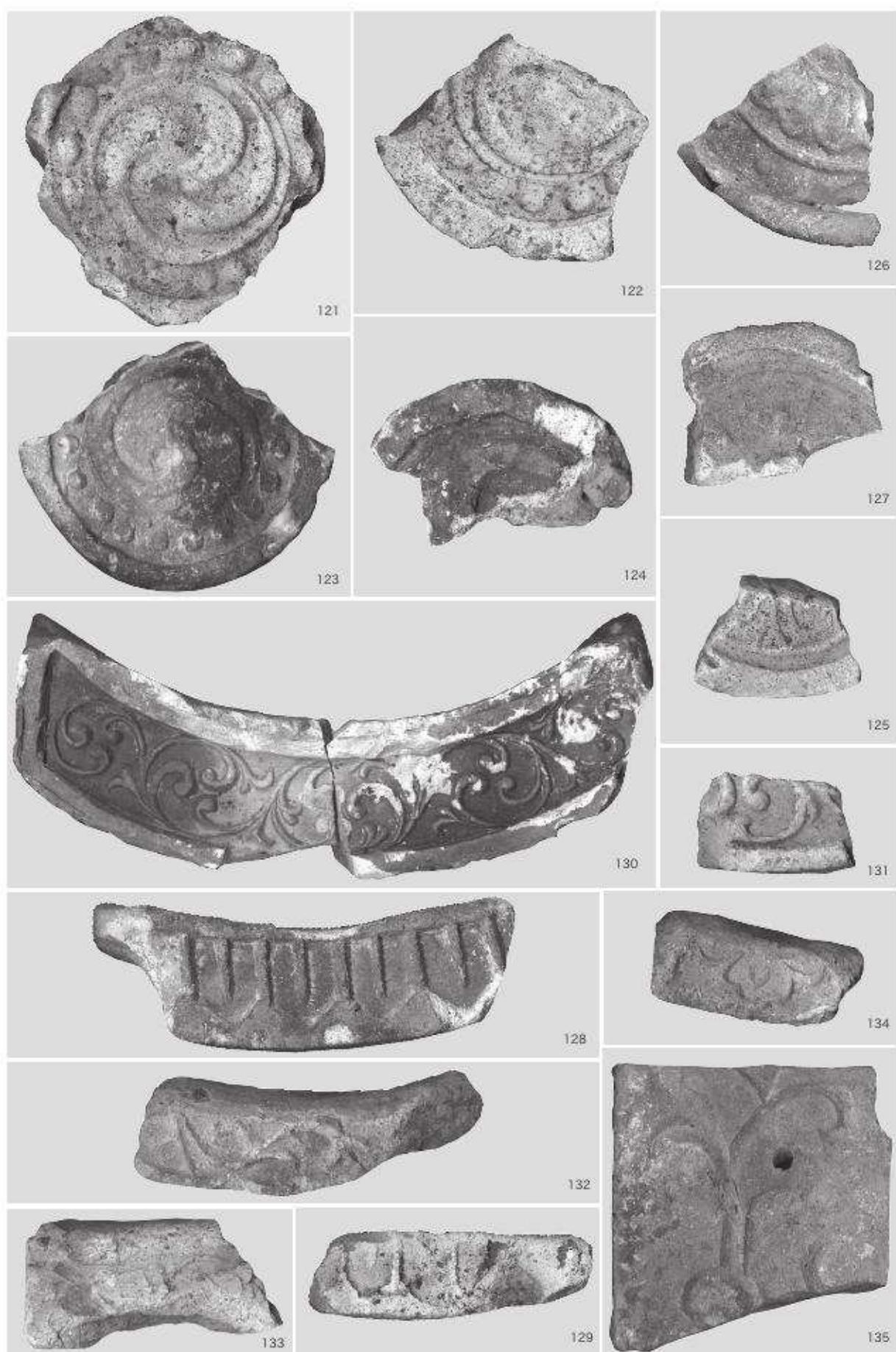


土壤 96 (55 · 56 · 58 · 59 · 61 ~ 63) · 土壤 62 (64 · 65 · 67 · 69 · 73) · 土壤 45 下層 (74 · 75 · 77 ~ 80 · 82 · 83 · 87) 出土遺物



土壤 11 出土遺物

圖版十六 遺物



整地層第1層（123）·整地層第2層（122·127·128·131）·整地層第3層（126·132）·土壤11（135）·土壤59（134）·土壤63（129）·柱穴109（130）·土壤112（124）·土壤121（133）·土壤140（125）·土壤557（121）出土遺物

## 平安京左京三条三坊五町 烏丸御池遺跡

発行日 2011年3月31日

編集発行 古代文化調査会

住所 〒658-0032 神戸市東灘区向洋町中1-4-125-1404  
TEL (078) 857-6368

印刷 (有)京都編集工房  
〒612-0868 京都市伏見区深草直達橋南1-524-24  
TEL (075) 643-6978